

豊庄だより



第 620 号 2020 年 6 月 29 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

前号で、今年のマスメディアは、6月19日のことや戦後75年のことをおろそかにしているのではという内容を書きました。その後、まさか私の声が伝わったわけではないでしょうが、福岡大空襲や戦後75年



の特集記事をかなり目にするようになりました。しかし、それらの記事の中でいくつか気になったものがありました。

1つ目は、福岡大空襲に関することです。博多区にある認可保育園の園長先生の話です（2020年6月20日付西日本新聞朝刊）。保育園が、福岡大空襲で多くの犠牲者を出した旧奈良屋校区に近く、園は毎年戦災地蔵（須崎町の須ヶ崎神社と黒田神社）にお参りし、供養をしているということでした。住職でもある園長先生が般若心経を唱え、つづいて園児も参拝。そして、子どもたちに、「国と国のけんかが戦争です。友だちとのけんかも戦争と一緒に。嫌なことがあってもたたいたりせず、お話し合いで解決できる子になりましょう」と語りかけたことが書かれていました。園長先生のお父さんが空襲の体験者で、かつてはお父さんから聞いた話を園児に話していたが、自身に空襲体験がなく「伝えきれていない」と感じ、最近は語ることをやめたということでした。私が気になったのは、まず「国と国のけんかが戦争です」という点です。子どもたちに、わかりやすく伝えるためにこのような言い方をされたのかもしれませんが、「戦争」は武器を持つての殺し合いです。「戦争」と「けんか」は別物だと思います。もう一つ、自身に空襲体験がなく、伝えきれていないと感じ、語ることをやめたという点です。戦後75年となり、体験者は少なくなり、直接の体験を語る人は数年後にはいなくなることでしょう。戦争体験の継承は大きな課題ですが、体験はしていなくても今後も語り続けなくてはならないと思っています。体験者と同じことは話せないかもしれませんが・・・。

2つ目は、父の戦争体験について語った（八女市出身の）作家安部龍太郎さんのことです。現在西日本新聞に、「四人の証言 大刀洗飛行場物語」という記事が連載されています。大刀洗飛行場（現在はキリンのビール工場）は、戦争中、特攻隊の基地でした。ここに関係する四人の証言が語られるのですが、その中に、安部さんのお父さんのことがありました。安部さんは25年ほど前、秀吉の朝鮮出兵の頃の明国の状況を調べようと中国に行き、その際南京も訪ねました。市内にある南京大虐殺記念館も訪ね、日本軍の悪行の数々を見て胸が痛み、受付で供養の線香代を差し出さずにはいられなかったと書いています。帰国後、南京の写真をお父に見せて記念館の話をする、「俺も南京に行っとた」と言い、急に立ち上がり寝室から1冊のアルバムを持ち出してきて、そこには南京中山門の前で歩兵銃を捧げて立つ軍服姿の父の姿があったそうです。南京陥落後の写真で、「お父さん、南京におったとね」と聞くと、「そうた」「どげんやったね」に「あげんなったら、普通じゃおられん」とお父さんは何かに抗議するようにつぶやいたということでした。安部さんは聞きたいことが山ほどあったが、父親を追い詰めたくないと思い、それ以来この問題には一切触れないまま亡くなられたということでした。もっと聞いておけばよかったと安部さんは述べています。これまで安部さんといえば、歴史小説を書く人（長谷川等伯のことを書いた『等伯』（文春文庫）は読み応えのある小説です）と聞いていたのですが、こうした背景に接したのは初めてでした。